

★わたしの意見

今年の

神戸まつり

岡崎典昭

〈神戸市市民局相談部長
神戸市市民祭協会事務局長〉



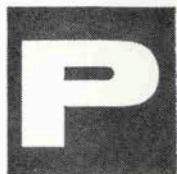
——花と海と太陽の祭典——「第四回神戸まつり」
が、今年も五月十八日(土)、十九日(日)の両日を中心に全市で盛大に行なわれます。宗教的、歴史的な「いわれ」のない祭が、大都会でできるのは、実に素晴らしいことです。その秘密は、市民の皆さんの「心」、「意気」がひとつになって「市民による市民の祭典」を作り上げるところにあります。

今年の神戸まつりも皆さんの知恵と力によって作り上げられました。明るい太陽のもと、山の緑、青い海を背に、日頃のかみしもとって、大人も子供も一緒になって、思う存分歌い、踊り、遊ぼうではありませんか。まつりを通して心と心のふれ合いが生まれ、新しいコミュニティが育ち、神戸が本当に心豊かな住みやすい街になるのではないのでしょうか。

今年も、各地域のまつり、中央行事、多彩な協賛行事の三つで構成されています。新しい企画としては、北区が盛大に「きたきたまつり」を催し、新しく仲間入りするほか、カーニバルの本場ニースの民族舞踊団アマダニッサルダが楽しいショーをお見せし、リオのカーニバルに参加したアフリカ・アカンバ・ダンサーズが皆さんと一緒にサンバを踊ります。更に神戸在住の外国の代表として「プリンス神戸」を新たに選んで、クイーン神戸と共に公式行事、地域活動等に参加して、皆さんとの交流を大いに深めていただきます。又企業が一層の参加を呼びかけ、将来企業とその地域の人々が一緒にまつりをもてるようになればと考えております。

まつりは、日頃のエネルギー爆発の場です。一年間いろいろ想を練り、その過程でわが街神戸をもう一度見つめなおす。そこに又なにか新しいものが生まれてくる。こんな「神戸まつり」をみんなで楽しみ、みんなで成功させようではありませんか。

神戸まつりなんてとおっしゃらず、あなたが主役なのです。それぞれの立場で積極的にご参加ください。



●三宮の楽しいショッピング・オフィス街への出勤に

末積カーポートビル

近代的な
立体駐車場
150台OK



●普通車30分＝¥100

スピーディな駐車 親切な応待—

■冷暖房完備・TV付の

待ち合い室もあります。

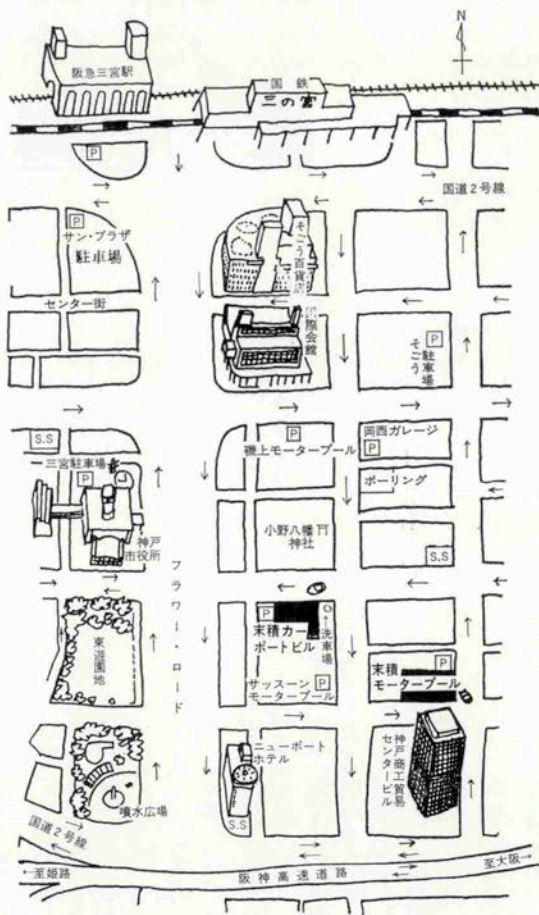
■あさ 8時——よる10時(日・祭日営業)



末積株式会社

神戸市葦合区磯辺通4丁目6番地ノ2

TEL 078 (221) 9 8 8 7



随想三題



〈カット／内ヶ崎 巖〉

コリショウ
凝性の街

内ヶ崎 巖

〈翻訳家〉



そろそろビールの美味しい季節である。夏のムードに欠かせないのがハワイアン音楽、とりわけ、スチールギターのあの甘美な旋律であるが、そもそも、スチールギターなるもの、十九世紀の終り頃

に、ハワイで土人が奏法を発売したもので、当初は、普通のギターを、椅子に坐って膝の上に上向けに乗せて演奏していた。当時は、ハワイアンギターと呼ばれており、このスタイルは、一九三〇年頃に、電気ギター、つまり現在の形のスチールギターが考案されるまで続いた。

日本にハワイアン音楽を紹介し、ハワイアンギターを最初に持ち込んだのは、ハワイ出身の二世、灰田可勝氏（歌手の勝彦氏の実兄）で、一九二二年に来日しており、その後、一九三三年に、これもハワイ出身の白片力氏（芸名「パツキー・白片」）が来日し、

共に今日まで日本におけるハワイアン音楽の普及に貢献して来たが、生粋の日本人で不世出のハワイアンギター演奏家といわれた名人がいた。村上一徳氏（故人）で、戦前のハワイアン音楽ファンなら知らない人はいないが、この村上氏が育ったのは実に神戸なのである。氏は神戸商大の学生時代、サザンクロス・カレジアンという名のバンドを組織して、神戸を中心に演奏活動をし、卒業後も関西中心に活躍を続け、JOBKからの放送などもおこなっている。その間、本場の一流演奏家見たさに、ハワイやアメリカ西海岸に渡って、その土地のナイトクラブだけを見て帰ってきたというから、物好きというか、凝り方は相当なものであった。

ところで、商店にしろ、スナックにしろ、その主人の凝り方が感じられて何とも楽しい気分になる店が神戸には多い。こんなに凝った趣向の店だと、さぞかし開店前は、凝り過ぎ故に相当のリスク覚悟で、いわば賭けた心境ではなかったかと察せられて微笑ましい。「勇気とは、成功の保証がなくても、試みとしての人生を生き抜くこと、結果を求めず、失敗を恐れず、大胆に」とは、哲学者ヤスパースの言葉であるが、「勇気ある」凝性の人が出した店は、戦前も

神戸に多かったと聞くし、村上氏のような凝性の人をも育てた何か

が神戸にはあるような気がする。

先日、ある店に立ち寄ったところ、何と一九二〇年代のスタイルでハワイアンギターを演奏して

いるではないか。昔のハワイアン音楽の好きな私は、欲しがっていた古美術品を骨とう屋で捜し当てたような気分であった。この時演奏していた御仁、見るからに物好きでこのスタイルの演奏に凝り固ま

っているといった感じで、一九二〇年代以前の曲を、いちいち作曲年代などを解説しながら演奏し

ていた。こんな古臭い曲を昔のスタイルで演奏する人も人だが、させる店の主人もおもった。

凝性の人が店を出し、凝性の人

がそこに集まっている、神戸とはそういう街かも知れない。

かしこくなる

「やいと」

福来四郎

〈神戸市立盲学校教師〉



私は、今は盲学校の美術のセン

セということになっているが、は、り、や、いとという秘技がある。私を盲学校へ結びつけたのも、この技のしからしむるところであらう。私とやいととの出合いは、北支那派遣の一兵卒の時にはじまる。

軍隊教育を批判したのがバレて、野砲兵兵長はえん戦的傾向があるとして隊長ににらまれ、これ以上進級することはなかった。そこで、私は演習にでないですむ風

呂たきの使役を連日志願した。風呂がわくとまず隊長が入るのが通例となっていたが、私はその前に汗を流していた。

その後、防空壕掘りで受けた足の傷が化膿して、毎夜熱をだすようになった。不寝番は頭をひやしてくれたが、あてにならないものであった。ある晩、極めて正確に時間をおいて冷たいタオルが交換されるのを感じた。私はその兵が誰であったかしらないが、その温情が今も忘れられないのである。回復にむかった頃、部隊がラバウルに行くうわさがとんだ。弱りきった私の頭に、やいとが浮び上ったのはこの時である。婦人雑誌でおぼえていたたった一つのツボ、それは足の三里の灸であった。

演習にははらったあとの班室で、私は、三里のツボにもぐさをおいた。火をつけた時、靴音にきづいた。ふりむくと部隊長が立つ

ていた。足をむきだしたまま敬礼した時、火のついたもぐさは靴下の中におちた。

「アツッ、ー」

腹をえぐり上げるような熱さがぐーんとこみあげてきた。汗と涙がにじんでいた。

「やいとをしつとるんか」

隊長は微笑を浮べて去っていった。

「ハハッ」

かくして私は復員後、鍼灸学校の夜間部へかよった。

二年後、鍼灸師の試験が各府県におこなわれるのをきくと、学校を卒業したことにしてもらって受験した。二つの県で受けたところいずれにも合格した。

私は今も毎日のように、学校でやいとかはりをする。もぐさと線香の臭いが廊下を流れると、盲児たちの鼻をだましおおせない。

「センセ、また、やいとしたな」

「センセ、私かてやいととんねんで」

スカートをまくりあげた女の子のへその上に、古いあとが残っていた。

「センセ、かしこなるやいとや、眼のよう見えるやいとはないんですか」

「センセは、頭に毛のはえるやいとをしたらええねん」

私は自分の頭や顔にはり、をうち

つづけた。今、老眼化していく眼は成果をあげつつある。かしこくなる灸は、やがて私の仕事に示現することであろう。

「センセ、学校やめたらボクとこへきーよ」

鍼灸師のこともは、親切にいつてくれた。盲学校を停年退職して、はり、やいとで生活している自分の姿を想像すると、ゆううつになるのはどうしてだろうか。

パリの街から

岩島雅彦

〈洋画家〉



三年前に鴨居玲先生と一緒にスペインに渡り、私はパリに住みつた。そして二年、ことし、二月東京の日動画廊での個展で久し振りに帰国した。

——最近のパリの様子はどうか、ファッションなどはどう思われますか——といったことをよく聞かれた。

私は絵描きですからファッションとは直接関係はないのだが、少

なくとも、シャンゼリーゼやサントノールのファッションには殆んど無縁といっている。

私がショッピンングなどをするのは、モンパルナス界隈、サンミッシェルあたりが多い。若い人向きのものや現代的なファッションはこのあたりが多い。最近婦人物ではオペラ座通り付近も人気があるようだ。

大体、感じとしては、パリのファッションについては、すべてに部厚さや、底の深さを感じる。洋服ひとつでも、一年前に買った客を旧知のように迎えてくれる。そして、商品については頑固に自説を押し通す。

「あなたには絶対この色でなければならぬし、このスタイルでなければならぬ」といった調子で親切をとおり越している——こんな時、ふと日本の呉服屋さんを想い出すことがある。

面倒になって言う通りになってしまふ。こんなことはファッションだけでない。文化についてもそんな感じが深い。

モンマルトルあたりにあるギャラリーなどは、画廊の主は殆んどお金持の夫人や未亡人などが経営していておっとりしたものである。

私のはじめて下宿に荷物ぶらさげてはいったとき、下宿のおばあさんがやってきて、さかんに、「絵

を描く仕事をなさっているというのは素晴らしいことだ。このアパートでは始めてのことだが、大変嬉しい」というのである。

お世辞であるというのは判っているが、日本ではこんなにはいかない、胡散臭い——表情が何んとなく残ってしまふ。

これは、ほんの話に過ぎないが文化やファッションが深く生活に根ざしているということであり、その根強さというのは伝統の重みがバックボーンになっている。

だから、パリはただ、現代のファッションをリードしているといったようなことで、パリのファッション文化をみていては何の理解も得られないと思う。

パリの市民のなかに深く沈潜して静かに息づいている文化の部厚さとファッション文化とがからみあってパリのファッションがあることを理解することが大切だと思う。最近、神戸でもファッション都市というようにことがいろいろすすめられているという。

神戸らしい、いいことだと思うが、このファッションと文化の関わり合いを十分ご理解あることだと思う。つまり、神戸独自の文化のなから神戸のファッション文化が生まれてくるのであって、文化的土壌がなくてはファッションは育たないということである。

□ある集いその足あと

ムジチ・ジョバーニ

中村 健

（ムジチ・ジョバーニ同人）



コンサートをはかえて真剣な練習風景

音楽学生がその成果を示す機会といえば、カリキュラムに組み入れられた演奏会やテスト等、限られた範囲以外に殆どありません。しかもそれらは演奏形態や様式、時間等すべての面で制約されたものでしかなく、発表の機会を自らで作り出そうと考えるに至ったのは極めて自然なことでした。又、我々は音楽活動がどうしても東京中心になりがちな現状にも不満をもち、なんとか地元神戸で演奏会をという結論に達したのです。

44年最初に実行に移したのが藤原治道（当時東京芸術大学声楽科二年）で、兵庫県出身の声楽科仲

間に呼びかけ神戸国際会館小ホールで演奏会をもちました。どうしても「おとなのおさらい会」的雰囲気から抜けられないものでしたが、しかしながら以後の活動の布石に十分な成果を確信した彼は、引き続き第二回の演奏会を企画実行に移したのでした。それは「歌曲と室内合奏の夕」と題し翌45年の9月神戸海員会館で行われたのですが、プログラムのに一応整った形にする事ができ、対外的にアピールできる体制となりました。第三回は翌46年8月芦屋ルナホールで新たにピアノ科も加わり、さらに発展させた形として盛況のうちに終える事ができました。「IL CONCERTO DEI MUSICI GIOVANI」（若い音楽家によるコンサート）という名称はこの年に生れたものです。

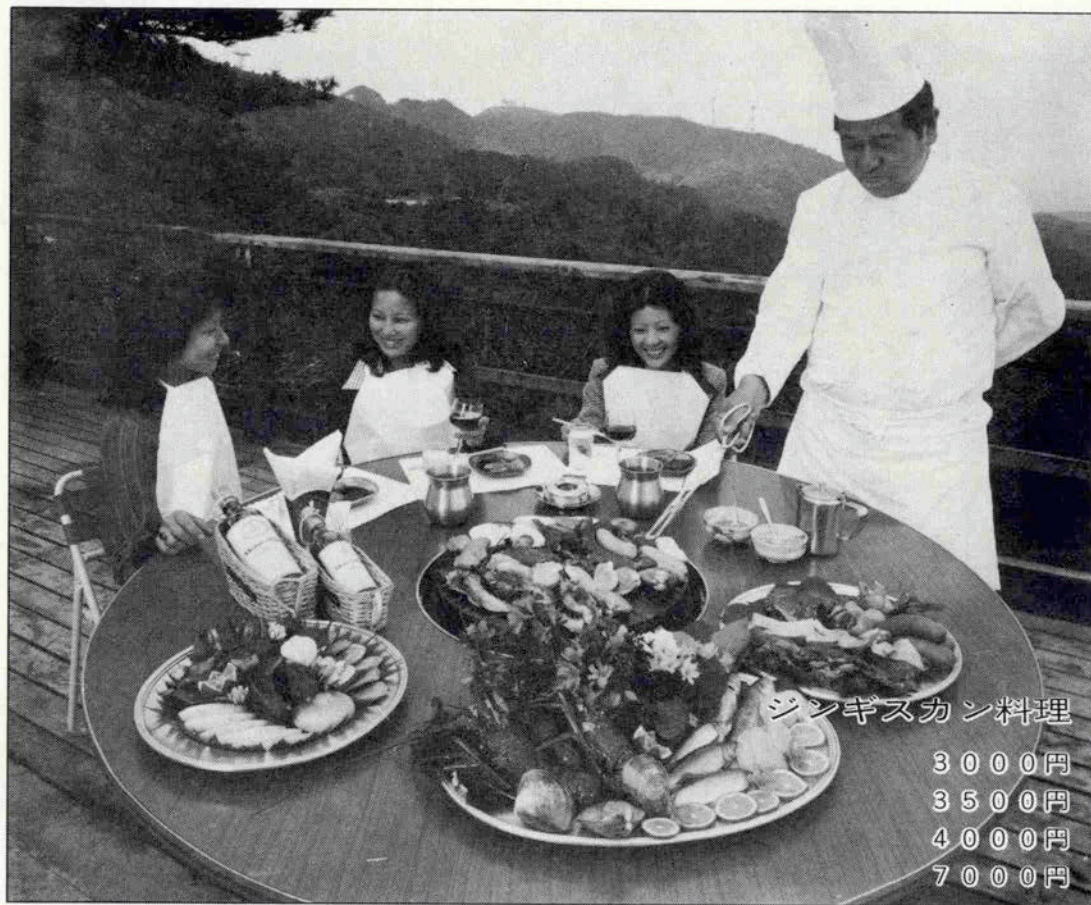
この回のマネージメントは私が担当したのですが、演奏会を開くのがいかに大変であるかを身をもって知らされた次第です。私は第二回に伴奏者として参加したのが第三回のマネージメントを担当する直接のきっかけですが、第四回マネージメントの季善銘も、第二回にヴィオラ奏者として参加したのがそもそもの始まりです。第四回は48年4月に「パロック音楽の夕」と題して兵庫県民小劇場で行なわれました。この回にコントラ

バス奏者として参加した文屋充徳（現四年在学中）は北海道旭川の出身ですが、神戸の女性と食物にとりつかれ今回のマネージメントを担当しました。

この四名を中心に演奏活動を続けてきましたが、メンバーは東京芸術大学の兵庫県出身者を中心に約30名。各々の個性を尊重する極めて流動的な組織であり、今後誰がどのような演奏会を企画し行なうかもわかりません。ただいろいろな形態の演奏会ができるよう、演奏者、作曲・編曲関係、マネージメント等気軽に応じてくれる仲間がまわりにいるということです。

五回の演奏会はそれぞれに印象深いものがありますが、なかでも第二回の高垣純（47年作曲科卒）の作品と、その作品における藤原治道の名唱、第三回の後藤富美雄（48年ピアノ科卒）のピアノ独奏（「エロイカ変奏曲」）、第四回の練習のゆきとどいたアンサンブル、今回のシューベルト八重奏曲における若々しい演奏等は特に記憶に新しいものです。未熟な我々ではありますが、財産である若さを発揮し、より立派な演奏会を続けることが、いろいろお世話下さった諸先生、諸先輩、同声会の皆様、美術学部の友人その他大勢の方々のご好意に報いることと思いい、勉強を続けていくつもりです。

新緑の季節 六甲の初夏をお楽しみください



ジンギスカン料理

3000円

3500円

4000円

7000円

六甲オリエンタルホテル

TEL. 891-0333

□れんさいずいそう〈2〉

霧笛

―わが小説の神戸

三枝和子

〈作家〉

え・石 阪 春 生

〈洋画家〉

長田神社から少し山手寄りの明泉寺町の友人宅に下宿して関学へ通っていた学生の頃から、一度、港の近くの、それも霧笛の聞こえるアパートに住んでみたいと思っていた。

卒業して二年ばかり市立上野中学に勤め、毎日阪急西灘駅へ通ったが、このときのアパートも西宮であった。昭和二十六、七年頃までの話で、当時、神戸市にはまだ焼跡が残り、本格的な復興はなされていなかった。お金との相談もさることながら、アパートや下宿そのものがなかなか自由に見つからない時代でもあった。

小説を書くようになってからは、時折、田舎を脱け出して市内のホテルに泊って神戸の街を取材

することもあったが、そうした朝がた、霧笛が聞こえて来ると、きまって若い頃のその願望を思い起すのである。



霧笛。物悲しい、獣の咆吼に似た重い響。東港の方角だ。M埠頭へは早朝に碇泊する船があるのだろうか。彼は、耳を澄まし、幾つ目かの、その霧笛の余韻を追いながら、港とこのスタジオとの距たりを測っている。乳色の濃い霧に掩われたまま、街は、まだ深い眠りの底に沈んでいるに相違ない。

私が昨年秋、上梓した書下ろし長篇『乱反射』

のなかの一節である。主人公の二十歳の青年が、思慕する年上の従姉と、その従姉が愛している中年のカメラマンと、カメラマンのモデルで従姉のレズの相手らしい女友達とのあいだにひき起される奇妙な四角関係に捲きこまれて過したヌードスタジオの一夜の翌朝のことである。

大人たちの淫靡な性関係に醜弄されて疲れきった青年の空白な心に、是非ともあの霧笛を響かさなければならぬ。おそらく私は無意識にそう考えていたのだろう。そのところは極く自然に出来あがった。というよりも青年の心に霧笛を響かすことにしてから、ヌードスタジオの場所を港の近く、というふうに決めたような気がする。

私は頭のなかに、貿易センタービルから国際会館までのあいだの、モータープールなどの多い建物の一角を想定した。一時は、和田岬あたりでもいような気もしたが、何とはなくそぐわなくて止めた。和田岬あたりの、どこか殺風景な眺めが好きで（ここ十数年見ていないので変っているかも知れないが）「W 岬周辺」という小説を書いている私だが、ヌードスタジオのある場所としては、そこは不適当だ。そう思えた。

もっとも、だからといって貿易センタービルと国際会館までのあいだの建物のどこかにヌードスタジオがあるというわけではない。これはあくまで架空の話である。ただ私の小説の神戸では、それらモータープールが散在する建物の一角に、幾分ハイカラで退廃した雰囲気漂わすヌードスタジオが、ひっそりと存在していなければならぬ。そしてその一室で、私の年若い主人公は、横に寝ているモデル女の眠りを妨げないように起き

出して、カーテンと窓硝子とのあいだの、狭い薄明りの空間のなかへ身体を滑りこませて港を眺めるのである。

こんな朝、年若い男が何を考えるのか、私は知らない。だから、彼が眺めた港の風景を描写するだけだ。

夜は、いま、しらしらと明けていくところだ。

ほとんど一晩中降り続いた雨が止み、港の方向から早い速度で藍色の雲が流れて来る。藍色の雲は、もう決して雨雲ではなく、一日の晴天を予告する透明なインクの色で、刻々に形を変えながら、風に吹きちぎられていく。薄く、軽やかな雲の塊の周辺が、海からの太陽によって、とき色に染められていくのは、もうすぐだ。

.....

霧が湧き始めたらしい。あまり深くはないが、細かい空気粒子が、物の輪郭を煙色ににじませる程度の霧だ。こういう日には、霧が晴れたあとの港の風景が鮮やかなのだ。水平線から突堤に林立する倉庫の壁際までの空間に満ち渡る硬質の空気のために、港は、一瞬、宝石のように輝く。

それから霧笛が響いて来る。霧はいつとき濃くなり、それから次第に晴れていく。私はそうした神戸の港の顔をこよなく愛している。私が本当に書きたかったことは、主人公の青年の内面よりも、むしろ港の風景だったかも知れぬ。私小説を書かない私が、たったひとつ正直に告白しているのは、神戸に対する愛着だと、この頃しきりにそう思う。

□れんさい随想〈1〉

ふるさと

故郷

秦 砂丘子

〈デザイナー〉

え・松本 宏

△洋画家△

子供の頃、極度に内気ではずかしがり屋だった私が、それだけ譲らなかつたことがある。箕面自由学園と神戸女学院への入学である。考えてみると不思議なことに、自分の人生への選択に対しては非常に頑固であつた。

箕面自由学園を卒業し、中学校を決める時、まず第一候補は、当時「十四」といつていた豊中の府立高女であり、第二候補は、どうということもなく私が選んだ神戸女学院であつた。

当時私は、箕面線の桜井という所に住んでいて、頭の良い子は、私の界限では、だいたい「十四」に行つたようだ。私の姉もそうで、その自慢話は、家中の夕餉の席を、たえず明るくしていたものだ。

私が神戸女学院をどうということなく第二候補に選んだのは、本当に漠然とした空気のような気が

持からだつた。理由は何もない。幼い頃、私はとてもうぬぼれていて、私が「十四」を望めば、そうなるものと確信を持っていたので第二候補など、私にとっては、つけ足だけの意味しか持たなかつた。

その当時、試験は、私立の方が先に始つた。ある日、願書を出すために門戸厄神の駅を下りた。人っ子一人いない駅だつた。母と共にであつた。不思議に、季節はおぼえていない。多分、早春だつたのであろう。

広々とした畠の中を通つて曲りくねる路があり、私達はそれに導かれて、はるかにみえる岳をめざして歩きだした。勾配の急な坂をのぼると、今私達がいた西宮平野が眼下に拡がっていた。

空が青かつた。空気が澄んでいて物音一つしなかつた。赤松の林がつづき、鳥が遠い所で、チ、チ、とないていた。



だらだら坂をのぼり切ると、突然に視界が広がり、四角い芝生、桜並木、藤棚などがみえた。学校の白い建物は、その奥にあった。それはちょうど、秘境のような印象であった。

帰り路、同じ路を辿りながら、私は興奮していた。私の心は、すでに決まっていた。「ここだ」「ここに決めた」。どういう風にして母にいったのだろう。私がいわずとも母には、もうすでに解っていたのかもしれない。

私の家は貧乏だったから、私が「十四」に入った方がよいことは、私も百も承知していた。私は、わがままだったのだろうか。でも母は、私という人間が何かを決意すると十年でも二十年でも決して変らないということをすでに知っていた。決めた。それにまた、普段、細かな要求をしない子が何かを望んだということを高く評価してくれたのかもしれない。ありがたいことに、私はここで、中学部、高等部、大学部と九年間をも過ごしたのであった。

人間というものは、ある時、突然に出会った情景が異様に気に入ったり、心に忘れられなくなったりするものだ。

私の友人でフランス女性だが、生れはブルタニユー。暗い海と灰色の空をもつ地だが、二十才の時、初めて南仏プロバンスと地中海を見て、「これが私の故郷、ここでいつか死にたい」と願ったそうだ。以後、日本にいても、彼女は毎日にプロバカンスにあこがれていた。今は望みかなくなってその地に住んでいるが。ゲーテやポール・クレイがイタリアに憧れたように、人はある時、ある地

で、自分なりの啓示をみる。

私にとっては、神戸から岡田山につづくあの地形がそうであった。海があつて、山がせまっている。なだらかな傾斜をおう赤土と白い家々。そして暖かい赤松の林。いつも太陽が舞っていて、すべてが静かだった。

学校では、あまり勉強したという記憶がない。今、思っても不思議だけど、友達と二人朝から、関学まで散歩し、すすきの茂った日だまりでおべんとうをたべ、風に吹かれて昼寝をし、午後の三時、やおら起き上つて、その頃、喊声を上げて校庭に飛び出してきた級友達と合体して、ソフト・ボールをやった。

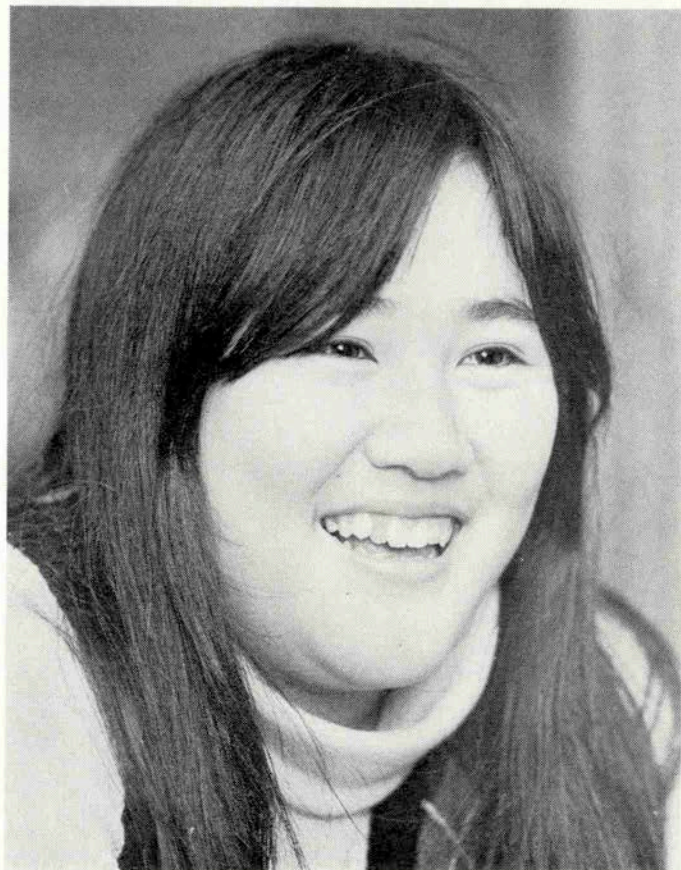
高二から高三までは、寄宿舎にいた。週に一度位だったか当番で、駅の近くのパン屋に、コッペ・パンをとりに行かなくてはならなかった。食糧難の時機。本当に飢えていた。それにいつも午後の四時。フカフカのパンは背中であたたかい香りを立てていた。「たべてしまおうか」友達が一瞬そういった。本当にそうしたかった。私達はしかし、たべられないでパンを背負って学校に戻った。あの誘惑に耐えた沢山の曲り角のある道。

三年前、東京からあの道を探して車をとばした。道はなかった。沢山の家々ができ、あとかたもなかった。しかし、私の想い出は、その家々を通して、小さな道を創った。そして、それは、レンジやタンポポと共に、いつまでも私の中に燃えつづけていることであろう。

□ インタビュー □

明るい素顔の神戸っ子

—「あなた」の小坂明子クン訪問—



三カ月余で二百万枚。爆発的なヒットをとばしたレコード「あなた」。その作詞、作曲から歌までうたった高校三年生、小坂明子クンにインタビューしてみました。

現代の奇蹟だの、今様シンデレラ、だのと評判は高いのですが、会ってみれば何のことはない。どこにでもいる、ちょっと甘ったれの、コロコロふとったオンナの子です。テレビで拝見する、あの人工装飾だらけのジャリタレントとは全く無縁の、健康な素顔を一緒に眺めてください。好きなもの「チャーハン」さらいなもの「数学」。それと、「責任感のない人」なんだそうですよ。

西宮市苦楽園口にある自宅の応接室。
トントントンと二階から降りてきて「いらっしやー

い」。ミニから飛び出したヒザっ小僧を毛布で包んじやって、さあ、何でも聞いてくださいって表情で、ニコニコしてる。で、まずは戸籍調べから……。

阪急六甲の近くで生まれ育った。チャキチャキの神戸っ子。小、中学校とも赤塚山の神戸大学付属へ通った。

「さんちか、センター街、よく遊びに行きました。セーターとか髪飾りとか買って……。食べものなら元町の、ホラ、牡丹園って中華料理店あるでしょ。いつも、あそこ」

「私、その方面、おくれたから、たいてい両親と一緒に。友達と行くようになったのは、中学の三年ぐらいからかなあ」

大阪音楽大の付属高校へ進学したところから、いまの西

宮へ転居した。

「でも、神戸って街、日本で一番スキ。山があつて海があつて、明るくて……」

同感！

クロウト筋の評——。

「あなた」つての、曲がいい。きつと、音感がすぐれてるのだろう。歌は、お世辞にもうまいとは言えないナ。歌詞は、甘さ、清潔さ、感傷……で、まあ年齢相応のきばえ、かな。

「歌はねエ、特別に勉強してないんです。発声とかア合唱なんかを授業でやってただけ。人前で歌ったこと、なかったんですよ」

なのに、あの記録的な売れ行き。なぜだろうか——と聞いたとたん、ケラケラ笑い出した。甘くて、明るくて、屈託のない笑い声。

「ソレねえ、わかんないんです。きつとねえ、はじめのうち、テレビに出てなかったからやないかな」そしてまた笑い。

話の意味、五秒ほどあとで了解できた。「私、こんなにふとつていて、美人でもないけど、TV出演するまではそれがバレなかった。だから、レコード売れたと思う」と、親愛なる明子ちゃんは言おうとしたのである。

いじらしい乙女ごころ、ではない。カッコよくないことなんか平氣の平左。私が歌をたのしみ、それを聞いて皆さんもたのしんでくれる。シアワセノ というアツケラカンとした幸福感であろう、これは。

「体重のこと、早く聞いてくださいよオ。答えませんから」そしてまた例のケラケラ。

テレビに出てからもレコードが売れているのは、こんな地のままで演じている親近感のせいナノダ。

「いえ。あなたの姿みてガッカリした。もうファンになるの、やめます」って手紙も来てますよ」

でも、この高校生、いいいたい事もいう。

「歌が上手なことよりも、歌以外のいろんなことをできる方が売れてるでしょ。アレ、間違っていると思うんです」

「人気って、すごくむなし。カッコさえよければ、誰にでも、そっくりショーの二セものにだって、キヤークーいうんだもの」

では、小坂明子よ、お前の実力は如何。

「これ（『あなた』）一曲しか売れない一発屋で終るかもわかんないけど……。ホントの力とか価値は、LPやら、あと二、三曲出して、リサイタルでもやってからでないと認めてもらえないと思うんです」

ハキハキと、笑顔を絶やさぬ受け答え。

父親は作詞、作曲を手がけ、バンドも持っているこの道のプロ。兄もピアノを業とする音楽一家。だが、血筋や天分だけではない何かを持っている。

「でもねエ、ほんの遊びのつもりでつくつておいた歌が音楽祭でグランプリ、レコードになればアツという間に当たったでしょ。自分の気持、まだプロに徹してないんです」

「将来は作曲家でいきたい。だって結婚して、三十、四十にもなつて外で歌つたら、私の家のような暖かいムードのある家庭つくれないでしょ」

わかった。君は若いくせにマイホーム型。

「ええ。私、自分の家に満足してる。だから、私の子供にも私のような幸せを味わせたい」

優しい両親に大事に大事に育てられた末っ子ちゃん。その環境と思想が産み出した「あなた」の大ヒット。当然ですよ。





スキのない服装からダイナミックな男のドラマが始まる——。
日本の商社員が赴任先のヨーロッパで屢々指摘される服装のワースト3は、①ワイシャツのダブダブ、②流行ラインから外れた服装、③色のコーディネートが悪さということです。この三点がビシッと決ったとき、そこから男だけのドラマが生まれるのです。

LADIES

San Sakae

MOTOMACHI-1 ☎ 331-7885

MEN'S

San Sakae

MOTOMACHI-2 ☎ 331-5121

第4回神戸まつり特集(1)

—花と海と太陽の祭典—

座談会

身銭をきって大いに遊ぼう

山脇陽三
〈神戸市民生活協同組合
専務理事〉

妹尾美智子
〈神戸市婦人団体協議会
会長〉

貝原六一
〈画家〉

川端耿一
〈オール関西編集部〉

★おっちょこちよいのやるまつり

山脇 神戸まつりのユニークなところは、まず、ハッキリとした形がないということ。それに、国際性豊かということは通り文句だし、神戸市在住の外国人がかなり多勢まつりに参加する。また、家庭婦人がまつりを支えていることも他に例のないことですね。家庭婦人がこれほどまつりの中軸をなしているのは珍しいですよ。若者も形にとらわれずに自由に参加して、よくぞ、これほどまでにまつりのなかにとけこんでくれたなと感じられる。これもユニークな点でしょう。それと、子供が各地区で非常に積極的に参加してくれる。今年第十八日の土曜日は学校も休みだと決ったし、余計、子供の参加も多くなるでしょうね。

過去のみなと祭りとか神戸カーニバルの流れが、年々われわれの望んできた方向へ近づいてきて、人と人とのコミュニケーションをよくするというまつり本来の狙いからいっても地域が非常に盛り上ってきたということは、色々と批判はあるとしても、神戸まつりらしい成長の仕方じゃないでしょうか。

妹尾 みなと祭りが非常に批判を受けて、神戸まつりという形に変わらざるをえなかったわけでは

が、この転換は非常にうまくいったと感じますね。みなと祭りでは行政の力が前へ出てきて、いわば、官製のまつりだと批判を受けた。それを市民のまつりに戻そうということだったんですが、そうやってきたようですね。今の形態は行政と市民とが一体になって、市民参加でまつりをつくっているようです。

普通、まつりというと神社とかお寺とか、宗教がかんでくるものですが、そういうものがかまわずに市民と行政とが一つになってまつりをつくり上げるといふ形は、神戸ではうまくいっているなあという気がします。

最初、神戸まつりの特徴を出すときに、神戸とはどんなまちやと考えたんです。何かしら寄り集まりで、おっちょこちよいで、新しがり屋で、バカに人がエエというところがあるわけですわ。そういう諸々が神戸まつりに出てきたんじゃないかなあ。

おっちょこちよいの最たる姿は家庭の主婦がパーッとまつりに出て行く姿なんです。また、若い人たちがスムーズにとけこんできたということ。これも、おっちょこちよいのせいですね。おっちょこちよいとおっちょこちよいがワァッと出てきて、それが寄せ集めの雑魚煮みたいなまつりとなって



山脇 三さん

きたんですね。それは神戸のまち

の特徴なんじゃないでしょうか。

神戸のまちの特徴がそのまま神戸まつりの姿になってきた。この辺はよかったなあという感じがす。

貝原 形がないということが、僕らの場合とっても参加しやすくなっていますね。今のまつりのあり方というのは、神戸カーニバルでできたんですよ。それが神戸まつりに移行して、今年で四回目になるんですが、これを定着させるために、ここで、最初に戻って、もう一度基本的な姿勢を考えないといけない時期じゃないかな。情性で流されるのじゃなくってね、定型がないといわれたけれど、



妹尾 美智子さん

常に新しいものを考えることが必要ですね。過去やってきたことをそのまま受けついでやるだけじゃ自動的に動いて行きますが、そうじゃなくて、動くときに悩んでくれる状態が欲しいんです。そうすることで参加者が増えるのじゃないかな。まだまだ考える余地があるのじゃないかという気はしますよ。

また、宗教につながっていないということなんですが、では、何につながっているのかというと人間性と自分自身につながっているんですね。まつりというのは自分のためにやるのであって、人のためにやっているのじゃないですね。だから、参加する一人ひとりがオレのまつりだと思ってくれないと具合悪い。

形がないということ、参加しやすいということ、最後まで通したいですね。切符を切って、許可をもらって参加するのじゃなくって、どこからでも入って行けるような形態ということが大事じゃないかなあ。絵画とか文化人とかはまつりに参加しないで批判ばかりするんですが、その連中がアトリエから出てきたということは成功だったなあ。(笑)

山脇 警察発表では昨年は二日間て百八万人が参加していますね。パレードで六十五万人ですか。見

て楽しんでる人も含めて、これだけの人を動員できるのだから、まったく、おつちよこちよいであることには間違いないわけですよ。陽気な神戸っ子らしい素晴らしいエネルギーですね。

川端 四回ともなると今までの神戸まつりに対する不満みたいなものが序々に色んなところで火を噴いているのじゃないですか。

貝原 それはあてしなないかな。

川端 お父さんやお母さんといった大人は大人の力でやってくれ。われわれ若者は若者でそれに対抗しないといかん。若者同士でもつとやりたい方向へもっていかうというところがありますね。

貝原 青年広場は主張するね。川端 規則みたいなものがないので、色んなところで色んなことをやって頑張ろうということですよ。

★まつりのモニメントを

山脇 今回の一つの特徴として、各地区の行事に身体障害者の参加がみられますね。今年は四地区ほどあるんですが、大変結構なことですね。身障者の方々も見ただけじゃなく参加できることはいいことですよ。

貝原 兵庫区では目の見えない人も踊るそうですが、みんな同じまつりをやるのだから絶対にいたわ



貝原六一さん

るな、彼らにも勝手に遊んでもらおうというのが基本方針らしいですね。

山脇 今年の新しい企画では、在神外国人のプリンス神戸が新たに選ばれる。二十カ国二十名ほどのお嬢さんに出てもらう予定です。それと中央パレードに南フランスのニースから参加する。シアマルダ・ニッサルダ民族舞踊団というグループですが、四十名ほどで花を添えてくれるんです。妹尾 これは神戸でないとできないことですね。

貝原 芸術広場では、子供たちに壁画を描かせようということで、十カ所の幼稚園でやります。芦屋



川端秋一さん

大学の芸術学部の学生が幼稚園児に絵の指導をしなから、それを壁面にしちやって芸術広場のなかに飾ってしまふ。

妹尾 今年はパレードの方は時間が延びましてね。遅くまでフラワールードを開放するそうです。

貝原 今年は壁画以外に懸垂幕をやりたんですよ。あれは水性ビニールで描いてますから残せるんです。今年から毎年三十本ずつつくったら来年には六十本。これを市役所なんかのビルの窓からパースと下ろすんですよ。

山脇 以前、仙台の七夕まつりをみて、こんな格好のものが何か神戸でもできんものかと考えておったんです。いいものを模倣するのはいいけれど、仙台と同じことをやっても仕方がない。独自性ということになる懸垂幕はいいですね。

貝原 これはぜいたくな夢なんですけど、ポートアイランドからフラワールードまで、毎年毎年参加した作家とか彫刻家で、たとえば川重の鉄板を使って彫刻をつくったりする。毎年二基づつ揃える。船から降りて港から市役所に行くまでの間にそれらがズーッと並んでいる。まつりが済んだら何もかもポツとなくなるのじゃなくて、まつりの形をどこかに残していきたい。カーニバル彫刻、カーニバ

ルモニュメントというものが欲しいですね。

川端 うちもつと現実的で、序々に舞台装置や楽器を描えていくようにしています。

貝原 昨年のまつりが何か残っていて、その上にのっかっていくということだね。ところで、婦人団体の有志が芸術広場でアイコンを売るとかということはできませんですかね。

川端 それを青年広場でやろうかという案もあったんですが、やっぱり主婦の方に任せようとなったんです。(笑)

妹尾 ただ、今はインフレで平素の生活が厳しいでしょう。だからまつりにまでそういう厳しさをにおわしたくないんですよ。むしろこういうときはアイコンがいくらかしておろうと、そんなんそっちのけにしてしまえという気持ちね。不景気だからこそ、生活の厳しさをかなぐりすてて、厳しさを逃げたいわけでしょう。

川端 青年広場の方は、これまでよりももっと若い人を入れようというので、この間から色々と集ってもらってアイデア会議をやっているんです。そのときの話に出てきたんですが、シラケムードの若者とそうでない若者がいるんですね。

貝原 まつりがよかったらそのシ

ラケた連中も入ってくるんだよね。

妹尾 まつりというのはあくまで楽しんだらいいんですよ。不景気になればなるほど、もっとやれやれというようなものでね。その辺からいうともうちょっとハメを外さなアカンなと感じますね。

貝原 ハメ外したいね。

川端 各地区での若い人の参加の仕方というのはどんなものですか。

貝原 若者は須磨の音楽の森。兵庫は子供中心。青年といえば青年広場と芸術広場ですね。

妹尾 神戸まつりには参加賞ってあるでしょう。あれをバッヂみたいなものにして、神戸市民がワシはまつりに参加したぞと胸を張って、三つたまった、四つたまったと自慢できるようなことがあるともっと楽しいね。

★裸になってまつりを楽しもう

山脇 今までからどことも予算の面で多少さびしいなという感じがするのですが、そういった表向きの金以外に、それぞれの団体とか市民がかなり身銭を切ってやっているんですね。

妹尾 まつりというものは、人から金を出してもらってまつりをやったんじゃないに楽しめないですよ。やっぱり、まつりってのは

自分で金出して楽しんでこそ本当自分たちのまつりになるのと違うかしら。まつりには自分で金を出して踊ろうじゃないか、遊ぼうじゃないかという気持ちを育てていきたくないなあという感じがしますね。大事にしたいですね。

それと青年層のリーダーの人たちが普段の背広姿をかなぐり捨てて、いわば、シャツ一枚になってまつりにとけ込んでくれたらね。

貝原 各個人がバラバラになって各地域へ入ってもらいたいね。

妹尾 そうなれば地域での青年との接触がずい分と違ってくるんじゃないにね。主婦にしても地域で泥まみれになってまつりのなかに入り込まないと駄目なんですよ。エエかっこうするなということね。

まつりにはエエかっこうするのがおったらアカンのよ。みんながスツ裸になって泥かぶってでもやるうか、というのがまつりの原動力なのよ。まつりとは地域が盛り上がるんじゃないかな。極端に言えば中央の行事はぶつつぶれてもいいんじゃないかなあ。

貝原 結論的にはそうなんだけれども、ただ、今のところ中央のいいものがぶつつぶれるほどのいいものを地域ではつくってないですよ。兵庫区とか垂水区とか意欲的なところは別ですが、お茶を濁し

ているところがありますからね。

妹尾 私どもには中央に負けるなという意識があるのね。中央のパレードで踊るなら地域で盛り上げた方がエエやないかとね。その方が地域住民とつながるでしょう。

貝原 ところで、ファッション都市ということとまつりとはつながるんですね。ファッション都市の基礎は芸術広場にもあるんですよ。おまつりファッションがどんな形になるかという、普段からファッション意識がないと、やっぱり、ハッピにハチマキになるでしょう。そうならないようにパレードとか芸術広場とか青年広場とかで頑張ろうということですね。

山脇 私どもとしては、今やっているまつりを更に充実させることしかないわけで、まあ、試行錯誤の繰り返しで、まつりをやったその時点から次のまつりを考えて行くことなんですね。そういうことで、この四回目もトライアルじゃないでしょうか。その辺を市民の方に十分PRして、まつりの実体をみてもらって本当に神戸らしいまつりはこれでいいのかというところで、毎年積み重ねて行く。そのなかから本当に神戸らしい神戸まつりが残って行くんじゃないですか。

妹尾 神戸まつりには終着点がないということですね。(於竹葉亭)